

詩集

化粧匣の都邑

塩寺はるよ

特205

10

1934



始



特205
70

詩 集

化粧匣の都邑

壺寺はるよ

呼鈴詩社刊



西園寺
化粧
匣の都邑



※

見事な春の歸郷から

沖の太陽ときみを皺の白紙で拂つた

祭典のはしやぎに芽をふく海の對岸

ひねくれた花嫁さまがおでましになる

※

童話の風は春の頬に

まばゆい朝に船出する

切紙細工の掌で夢を呼びさまし

あなたもお聴き

古風な月の輪の手まりうたを

※

陽気な唄にまどはされて

曇り日の林を行つたり來たりする

喜劇はそんなに仕組まれて

化粧匣に朝をつつんだ

あなたの頬の間から

寺院の柱が見えて來た

※

沖で見つけた家族の繪

ゆるる馬車で睡眠をもよほして

街の風評が雨の中を横切つた

水色のランプ

水色のランプ

この誇を傷めまい

あなたの耳朶に揺られて石像はやさしく

葡萄畑におり立たう

にはかに歸る人聲が聞えると

影の人の

夜の會話は吐切れました

美 顔

急使が着いた夢の夜には

はにかみさへも黄金色に輝く

隣人への挨拶も祈りと見せかけ

水色の帽子をかむり直す

エトワアル寺院の繪の前

白 花 束

胸衣に想ひつめて

西班牙のカード切つた

黒猫の卓子

ペルシ料理の夕は

硝子皿にも黄薔薇添へて

聖日

候鳥よりはやく

聖魚は影のやうな御微行振りで

そのバラの中に住まはれた

館には不意に黄金色の焰が立つた

失明の民は樹の下に座して

はるかな地に海の水を捧げた

愛のほこり

しがない夢のたそがれは

ミニオンヌの宿にもかすかな星色の灯がともつた

叙情詩娘も居るやうな

窓の轍により添ふて

無頼の輩は流行唄にうつゝを抜かした

栗色のネクタイに添へて

A. M. Okamoto

ゴム輪に乗つて川を渡ると

草深いフィルムの中に人聲がする

あなたの髪を風が過ぎ

バラの微笑みならもう一度

風 説

冷い觸感を掌にしるすと

青い海洋はなめらかな皮膚を残して

遠い國へ逃れてゐつた

ランプの下の置き手紙

マアブルの晴着

小鳥のやうに晴れやかに

微笑は窓にとめませ

煙の見える丘に頭を打ち振り

出發の日に色添へる

数々の五月薔薇よ

祭典

晴れた日も青葉の下なら御自由に

木馬の館も愛で燃え

かへらぬ會釋で行き過ぎる

對岸

白く路

肩をへだてて

ささやける銃眼よ

陽のかけや

歸還路に砂ぼこりを立てた

護謨の林も見ずに

愛の日

晴れた日は蝶々の夢など編んだ

遊びつかれて假睡する

青葉の膝に招かれて

けなげにも影とよれよれ

春

一

遠い象徴はランプの光よりも淡い

人を訪ねるあけ方から

虹のごとく頼りない

人形に祈りを捧げたり

二

陽の目も當らぬブドウ園の

やさしい水源の便りにも

あらそはれぬ

古代を眠る石のひと

鹽寺はるよ畧歴

大正三年十月愛知縣新城町に生る。大正十四年春濱松市に移

轉。昭和六年私立西遠高等女學校を卒。昭和七年十月詩誌へ呼

鈴▽同人に加盟し翌八年十二月アルクイユのクラブ員に推薦さ

る。昭和九年五月病を得、濱松市にて逝去する。年齢二十一歳

昭和九年九月三十日印刷 昭和九年十月五日刊行
詩集化粧匣の都邑 頒價40錢・著者 鹽寺はるよ
・編輯兼 刊行者 浦和 淳・印刷者 長山久・
刊行所濱松市淺田町848の2 呼 鈴 詩 社

終